

氏 名	志 賀 清 邦
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 349 号
学位授与の日付	平成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	推理論をめぐる仏教徒とジャイナ教徒の論争とその思想史的意義の考察

論文調査委員 (主 査) 教授 御 牧 克 己 教授 徳 永 宗 雄 教授 赤 松 明 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、推理論をめぐる仏教徒とジャイナ教徒との論争に焦点を当て、インド論理学史におけるこの議論の新たな位置付けを試みることである。インド思想史において、ある一つの理論は思想的立脚点を異にした集団同士による緻密な論争を通して発展を遂げていくという特徴がある。対論者の見解が新理論創始の引き金となったり、他学派からの批判を排斥し自派の理論を防護する過程で自派の理論が整備・強化されるといったこともしばしばである。また本論文の最大の特徴は、今まで注目度の低かったジャイナ教の諸文献を駆使することにより、従来になかった視点を導入するとともに多くの新情報の提示が可能となったことである。以下、各章における考察結果を要約する。

まず第2—3章では、TS(P)の「推理の考察」章を中心テキストとして、正しい証因の条件設定についてのジャイナ教徒と仏教徒の論争の争点とそれぞれの立場が考察されている。第2章における最大の功績は、完全な形ではないにせよ、ジャイナ教徒 Pātrasvāmin の年代およびその思想の全体像が明らかになったことである。Pātrasvāmin の年代は、直接的根拠から Dharmakīrti (ca. 600-660) 以降 Śāntarakṣita (ca. 725-788) 以前であることが判明した。さらに間接的根拠から、Śākyabuddhi (ca. 660-720) 以後か同時代で、Arcāṭa (ca. 710-770) 以前と限定することができる。また、彼の著作 Tri-lakṣaṇakadarthana の一部と考えられる断片は、TS, TSP からのみならず、Akalaṅka の著作 NVin から回収されている。

第3章では、Pātrasvāmin の見解に対する仏教徒の反応、および仏教徒自身が立てる推理論について考察した。その結果、Pātrasvāmin の内遍充論に対抗して仏教徒が外遍充論を擁護するという従来考えられていた図式は、必ずしも成り立つわけではないことがわかった。仏教徒は、三条件を擁護するものの、一貫して〈全ての場合を包括する遍充関係〉の立場に立つ。証因の一条件への対抗策として主題所属性の意義を再確認したことが仏教徒の批判の最大の特徴であった。この点については、Karaṇakagomin がより明確な論拠を示している。

第4章では、Vādirājasūri が Pātrasvāmin に帰する NVin の断片を出発点として、ジャイナ教徒による三種の証因批判が検討されている。論証対象の肯定・否定という形式によって証因の種類を区別し、否定を論証するための〈非認識〉という証因を認めるならば、肯定を論証する場合にはその反対の〈認識〉という証因を認めるべきであるというのがジャイナ教徒の見解である。ジャイナ教徒はさらに、〈認識〉という証因も結局非認識ただ一つに還元しようと主張する。この断片中に見られる主張は、Pātrasvāmin の年代想定的重要な一材料となった他、後のジャイナ論理学史に多大な影響を及ぼした。

第5章では、ジャイナ教徒の刹那滅論批判が取り扱われている。本章の問題意識は、Durvekamiśra が HBTa において Pātrasvāmin による偈を紹介している事実に端を発する。ジャイナ教徒は、刹那滅論証で用いられる〈存在性〉が矛盾の証因であると批判する一方で、その同じ証因を用いて多面性論証を試みる。このことから、ジャイナ教徒にとって刹那滅論批判と多面性論証は表裏一体の関係にあったことがわかる。

第6章では、ジャイナ教、仏教、ニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派それぞれの文献に見られる〈内遍充〉・〈外遍充〉の

用例を時代順に網羅的に検討することによって、三者それぞれの立場および相互の関連状況が明らかにされている。Dharmakīrti は、Dignāga の提唱した証因の三条件を受け継いだものの、Dharmakīrti にとっては、〈証因の三条件〉＝〈外遍充〉ではなかった。三条件のうち主題所属性の位置付けは据え置かれるものの、第二・第三条件によって得られる肯定的・否定的必然関係については、いかにすれば遍充関係を直接的に把握できるかという問題へと移行した。しかし Dharmakīrti が内遍充を主張するというわけではない。彼の興味はむしろ、〈本質的結合関係〉の理論の導入により、不可離関係という論理的必然性に存在論的根拠を与えることにあったと思われる。従来 Siddhasena が内遍充論の創始者であるとされてきたが、彼の著作 Nyāyavatāra の記述には先行する論理学者への言及が認められることから、内遍充論の実質的創始者は Siddhasena ではないといえる。また、Pātrasvāmin 以前の Samantabhadra は喩例のない推論式を構成するが、〈他のあり方でありえないこと〉という概念は未だ確認できず、Samantabhadra もまた内遍充論の創始者であるとは言い難い。以上のことから、証因の一条件〈他のあり方では成立しえないこと〉の発案者 Pātrasvāmin が、その理論を契機として〈内遍充〉という概念を創出したのではなかろうか。また Pātrasvāmin の後に出た Akalaṅka は、ジャイナ論理学における内遍充論を確立した。彼は Pātrasvāmin の証因一条件説を受け継ぎ、喩例の無用性を説いた他、特に過小不定の問題の解消に対して大きく寄与した。遍充関係の把握手段として〈タルカ〉を推理とは別立てし、そのタルカによって〈他のあり方では成立しえないこと〉が把握されるべきであると主張する。〈タルカ〉と〈他のあり方では成立しえないこと〉がジャイナ論理学における内遍充論の理論的根拠となったのである。Akalaṅka の後も内遍充論に関する議論は続くが、ジャイナ教徒にとって内遍充論は〈多面性論証〉のための強力な武器となった。さらに、Dharmakīrti から Vādidevasūri に至るまでの、内遍充と多面性論証また内遍充と刹那滅論証の時代的変遷を考えると、最終的に Ratnākaraśānti がそれまでの仏教徒が否定し続けた内遍充論を受け入れそれを刹那滅論証に用いたのには少なからずジャイナ教の多面性論証の影響を伺うことができる。一方、ニヤーヤ、ヴァイシェシカ学派の用例を検討した結果、後代のニヤーヤ・ヴァイシェシカ学派の論理学者らは、両術語を単に遍充関係の形式論と捉え、いずれか片方あるいは両者を否定する態度をとるわけではないことが明らかとなった。彼らはむしろ、自らの認める推理論の体系を説明する際に両術語を取り込むのである。

第7章では、Pātrasvāmin の見解が名前と共に紹介される TS(P) 以外の文献である NBPS の第2・3章が扱われている。NBPS は他の NB 注釈者の言及しない情報を提供してくれる他、8世紀インドの思想状況を概観するのに役立つ貴重な資料である。Kamalāsila の二つの著作 TSP と NBPS の著作順序については、2箇所のパラレルの存在から TSP → NBPS という順序が想定出来る。

第8章では、チベット人の紹介するジャイナ教思想が考察されている。主に依拠したテキストは、BSGT ジャイナ章である。著者ウパロサルは、BSGT ジャイナ章の記述に関して、TS, TSP, MAV, MH, TJ を主要なソースとし、それらを明示的に引用する他、地の文でも特に TJ を頻繁に利用・参照している。また、ジャイナ章の前主張部分は、9つの知られるべきカテゴリー・木々の有心論証・仏陀の一切智の否定という3つのトピックから構成されている。BSGT に先行し、ウパロサルも直接参照したと考えられる宗義書 Rig ral grub mtha' (RRGT) にも、上記3つの主要トピックに関する記述が含まれる。同書中にはその他、BSGT には見られない Pātrasvāmin の見解や三認識手段説も紹介されており、本著作の重要性を垣間見ることができる。本テキストの校訂・翻訳および詳細な検討が今後の課題である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、シャーンタラクシタ（725-788年頃）の『真理綱要』とそのカマラシーラ（740-795年頃）注に対論者として登場し批判されるジャイナ教徒パートラスヴァーミンの学説の検討を出発点として、推理論をめぐって仏教とジャイナ教との間に交わされた論争に焦点をあて、その吟味分析を通じて両学派の中で夫々に発展してきた推理論の諸問題の思想史的意義を考察したものである。全体は9章からなり、第1章の序論に続いて第2—5章に於いては、パートラスヴァーミン説の吟味に始まるジャイナ教の推理論の発展史、仏教推理論の歴史、両者の論争の争点（刹那滅論、多面性論）が扱われ、第6章に於いては、両者の推理論の核心ともいえる、外遍充、内遍充論の発展史が吟味考察されている。第7章はパートラスヴァーミン説を対論者説として標的とするカマラシーラの別の論書『正理一滴論前陳要約』の第2、第3章の紹介に当てられ、第8章はチベット人が紹介するジャイナ説を検討し、第9章は全体を総括し結論を述べている。さらに、副論文として、以

上の論証を支える資料として、(1)シャーンタラクシタの『真理綱要』とそのそのカマラシーラ注の左右対照に配置されたサンスクリットとチベット語の校訂本並びに和訳注、(2)カマラシーラの『正理一滴論前陳要約』第2、第3章のチベット語の校訂本並びに和訳注、(3)14世紀のチベット人ウパロサルウパロサルの宗義書のジャイナ章の校訂本並びに和訳注が付されている。かくして本論文は、本論だけでもA4版ワープロ原稿200頁を超え、副論文を合わせると500頁を超える労作である。

本論文が明らかにした新しい知見は数多いが、特筆すべき功績として少なくとも次の4点を挙げる事が出来る。

〔1〕 仏教文献に批判されるジャイナ教の推理論をジャイナ教自身の論書の中に同定し、多くのジャイナ教論書を駆使して明解なジャイナ教論理学史の叙述に成功している点。パートラスヴァーミンの年代の特定と彼による〈それ以外の仕方ではありえないこと〉という証因の一条件説の創始、次いでシッダセーナによる内遍充論という用語の初めての使用、次いでアカランカ(720-780頃)による内遍充論の確定、彼による遍充関係の把握手段としての「タルカ」の導入、以後ジャイナ教徒にとって内遍充論が「多面性論証」のための強力な武器となること、などが見事な仕方では明解に論証されている。

〔2〕 仏教の論理学については既に従来多くの研究が存在するが、論者は、ジャイナ教との論争というフィルターを通して、種々の問題点をより明確にしている点。ディグナーガ(480-540年頃)による「証因の三条件」説、外遍充論の擁立、次いでダルマキールティによる「全ての場合を包括する遍充関係」の概念の発見によって「証因の三条件」説、外遍充論は実質上意味を持たなくなる点、しかしながら内遍充論が主張される訳ではなく、内遍充論の導入はラトナーカラシャーンティ(11世紀)を待たねばならない点、一方外遍充論も捨てられてしまう訳では無くモークシャカラグプタ(1050-1202年の間)が刹那滅論証に対して外遍充論、内遍充論の両者を並記しているのは仏教の最後期にいたるまで両者の対立があったことが確認できる点、等の諸点を明解に論証している。

〔3〕 副論文として提示された三種の資料は、サンスクリットは写本にまで戻って確認し、チベット大蔵経本は五本(チョネ、デルゲ、ナルタン、北京の諸版並びに金写本)を校訂するという現在参照しうるものは全て参照するという徹底した態度で準備されており、また、チベット蔵外文献は論者が初めて公開するものであり、この分野で研究を続ける今後の研究者に必要不可欠な重要な資料となっている点。

〔4〕 チベット蔵外文献に記述されているジャイナ教思想を紹介するという、従来試みられたことのない研究を含む点。チベット人によるジャイナ思想の紹介はインドのジャイナ教思想研究にとって本来マージナルな意味しか持たないはずであるが、インドの論書に未だ同定されていない説が紹介されており、今後の調査に注意を喚起する点で重要である。また、現存のチベット語の辞書は仏教関係の語彙の充実度に比べて外教の語彙はほとんどが収録されておらず、この意味で、従来辞書に確認されないジャイナ教関係のチベット語の語彙を多く補充出来る点でも本論文は非常に重要な意味をもっている。

以上のように優れた本論文であるが、要望点や不備もない訳ではない。要望点は、ジャイナの側では、シッダセーナの年代が従来より後代に設定されることになった以上、サマンタパドらに注をして内遍充論を主張するヴァスナンディン(650-700頃)との前後関係が微妙となるので、内遍充論という用語を最初に用いた人物がシッダセーナであるのかヴァスナンディンであるのかという点についてクロノロジーをさらに精緻に検討する必要があるという点、佛教の側ではジュニャーナシュリーミトラやラトナキールティの立場の解明にもう少し踏み込んだものを期待したい点である。論者は、論理的必然関係と実際の因果関係との両方に対して「肯定的随伴関係」という用語を用いているが、誤解を生じる場合があるため「肯定的必然関係」「肯定的随伴関係」というように用語を使い分ける方が望ましい。また、資料の誤読、誤訳、誤記、誤植等も少なからず認められ、せっかくの好論を汚している。しかしながら、要望点はいわば望蜀の言であり、また、不備は少しの努力ですぐに修正可能な程度のものであり、本論文の価値を著しく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2006年1月6日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。